
心を襲う悲しい記憶

封弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心を襲う悲しい記憶

【Nコード】

N8629D

【作者名】

封弥

【あらすじ】

江戸川コナンの生活を送ってきて七年後のある日、組織の一室での大爆発により蘭を失ってしまう。その後、突然哀から別れの手紙という物が送られてきた。

1（前書き）

コ哀が苦手な方は、読まないことをお勧めします。
今回の小説は、コ哀がメインなので。

其れは朝の出来事だった。

『……ん？お早う、灰原』

灰原、と声を掛けても返事はない。
どうしてだろう。

俺は寝ていたソファから起きあがり、辺りを見渡す。
目の前にある机に視線を戻したとき、一通の手紙があった。

『……なんだ、これ』

そう言つて俺は手紙の封を切り、中身を取りだして紙を広げる。

『えっ！！！！？』

手紙の一番上に書かれていた文字。

『工藤君、これは別れの手紙だと思つて』
そう書かれていた。

俺は思わず手紙を持つ手を緩め、手紙を落としてしまう。
直ぐに我に返つて、急いで手紙を拾う。

『工藤君、これは別れの手紙だと思つて』

私何処に行つたと思う？ 其れは敢えて教えないわ。

……それなりに近い場所だけだね。

貴方もよく知っている場所だわ。

何度も行つたことがあるはず。

何でこの場所に行ったのか、教えてあげるわ。

その前に、前置きよ。

貴方を小さくさせてしまったのも私が原因。

辛くなつて、逃げ出したような物よ。

…現に、蘭さんを死に追いやつてしまったのも私。

見ていられなかった。私は、人を殺す薬を何度も作った。

凄く、後悔しているわ。

だから貴方に会わす顔もない。

このままじゃ、大切な人まで殺してしまう。

組織は確かに壊滅した。

だけど、私はまだ殺した人への償いをしていない。

こんな危険な薬を作った私は、まだ何も償いをしていないの。

何でこの場所に行ったのかって言うのは簡単に言うとな…

小さな事でもやって今までの罪を償いたい。

そろそろ分かってきたかしらね。

私のいる場所。

ま、知リたかったら博士にでも聞いてみなさい。

博士には工藤君にそんな事を聞かれたら素直に答えてって言うて

あるから大丈夫よ。

聞きたければの話ね。

ま、聞いたら直ぐ貴方はそこに行くでしょ

どうしてそんな場所にいるんだ、とか言うてね。

だけど私はその場所から出るつもりはないわ。

この罪は、大きく深い物よ。

そう簡単に償える物なんかじゃない。

罪を償い終わるのは何時か分からない。

先の事なんて誰にも分からないわ。

最後に。

今まで私を支えてくれて有難う。

本当に嬉しかったわ。

自分の運命から逃げるなっっていつてくれて、有難う。
だから今こうして運命から逃げずに生きているわ。

自分の運命は、今私がいる場所で過ごすのが運命よ。

もしかしたら、帰れないかもしれない。
そのために別れの言葉を言っておくわ

さようなら　そして、元気で…

灰原 哀

俺は、手紙を持っていた手の力を強めた。
手紙の一部がくしゃつとなった。

俺は、灰原の手紙に書いてあった通りにしたかった訳じゃない。
けれど居場所は知りたかった。

…蘭を失った今では、灰原の方に好意が向いているから。

「博士ー！！！」

「おお何じゃ新一」

「灰原は…何処にいる！？」

「……警視庁じゃよ」

「警視……庁……だと!？」

「そうじゃ。哀君は自ら出頭したんじゃよ。『自分は滅びた組織の生き残りだ。これまで薬で殺された人は全て私が殺した』と言って逮捕されに行きおったわい」

「……くそっ!!!」

俺は手紙を握りしめたまま、阿笠邸を飛び出した。
向かう先は勿論警視庁。

…灰原を、このまま警視庁にいさせるわけにはいかない。

『私はその場所から出るつもりはないわ』

そんな言葉に従うつもりなんて無い。

絶対に連れて帰る。

もう、蘭みたいな失い方をしたくなんて無い。

蘭が江戸川コナンの俺を工藤新一と認識した日の夜だった。

そして其れは江戸川コナンとして過ごして、七年が経っていた。

『新一!!!助けて!!!!!お願い!!!!!』

『待ってる!今助けてやるか』

「助けてやるから」の「ら」を言おうとした瞬間に、蘭と俺の間で爆発した。

爆発が止んだときには、もう其処に最愛の人の姿はなかった。
ただ、火が燃え盛っているだけだった。

『蘭——————!!!!……!!!!』

その場に崩れていく俺。

頬には一筋の涙。

泣いた事なんて、無かったのに。

…もう、大切な人を失いたくない。

灰原が捕まるより、俺が捕まる方が正しかったのかもしれない。

蘭を殺したのは、俺ですと言って。

守ってやれなかったのは、全て俺のせいですと。

それは今置いておいて良い。

今、助けなきゃいけないのは灰原だ。

…もう、誰も悲惨な失い方をしたくない。

灰原以外にも、歩美達、園子…その他色々。

警視庁の前で肩で息をする。

全速力で走ってきたため、やっぱり体力の消耗は早かった。

スケボーで来るべきだったなと今更ながら後悔した。

「目暮警部!!」

「コ、コナン君? 何故君が此処に」

「灰原に、会わせてください」

「灰原さんにか?…分かった。面会時間の制限は」

「すいません、制限を無しにしてください。それと…灰原を、釈放

してください」

「そんな！勝手に出来んぞ！？」

「彼奴は、此処から出るつもりはないと言っていました。だけど、俺は決して許しません。…例えば、彼奴が組織の生き残りだとしても、今の世界を必死に生きていて貰いたいんです。…お願いします！！」

最終的に俺は頭を下げる羽目になる。

暫くの静寂の間も、ずっと頭を下げたままだった。

灰原を救えるのなら。

闇の世界から、解き放ってやれるのなら。

卑怯な方法であろうとも、実行する。

「…分かった。灰原さんは釈放してやる。コナン君がそこまでいうのなら」

「有り難うございます！場所はどちらですか？」

「案内しよう」

目暮警部の後を、ゆつくりと着いていく。

灰原は、子供だから刑務所には入れられないはずだ。

…彼奴は、自分で刑務所を希望したのだろうか。

少年院ではなく、刑務所を。

「此処だ。…それと、釈放する際に扉を開けなければならないから、君に鍵を渡しておくよ。後で必ず返すんだ」

目暮警部は其れを言い残すと、他の刑事を連れて去っていった。俺は、ノックをした返事を待たずに扉を開ける。

其処にいたのは、紛れもなく灰原だった。

「やっぱり来たのね。此処に来れたと言うことは、博士に聞いた…」

「帰るぞ」

「…いいえ」

「そう言うだろうとは思ってたけど、絶対に一人にさせない。…もう、誰も失いたくないんだ」

「え？」

「蘭と同じように、夢でも蘇ってしまうような失い方をしたくない。…お前は、闇から解き放たれるべきなんだ。警部からも許可を貰っている」

「きよ、許可って！！貴方釈放許可を！？」

「警部に頭下げてまで頼んだ」

「貴方子供の状態なのに！！！」

「警部も、お前を逮捕する気はなかったんだそうだ」

「！？」

「第一子供が刑務所にいること自体可笑しい。普通なら少年院だろ？」

灰原は、即私が希望したのよと答える。

そしてそれにやっぱりなと俺も答える。

「もう、お前を失いたくない。…蘭と同じように」

「工藤君……」

暫く見つめ合ったままの俺等だったが、俺は直ぐに立ち上がり鍵穴に鍵を差し込み、ゆっくり回す。

高い音と共に、鍵を元の方に回し、鍵を取る。

そして俺はゆっくり扉を引いた。

「…帰ろう、灰原」

「……………本当に、帰って良いの？こんな私が、帰って良いの！？」

「ああ良いんだ。今を充実しろ」

「…っ、ありがとう」

灰原は掠れた声でそう言った。

次の瞬間、俺は体に少し重みを感じた。

無理もない。

目の前で、灰原が俺の服に顔を埋めているから。

ふっと笑いそつと灰原の頭に手を乗せた後、暫くこの状態だった。

阿笠邸。

「…御免なさい。気でも狂ったっぽいわ」

「いいや、気にしてないから」

警部に鍵を返し、博士の家に戻った俺達。

地下室で灰原は暫くの間、寝ていた。

ここ数日、灰原は寝ていなかったから。

きつと、手紙の内容を考えていたのだろう。

「…ゆっくり寝ろよ。灰原」

そう呟いた後、俺は灰原の寝ているベットの端で腕を組み、頭を乗せた。

今、この部屋から出てしまえば灰原がまた消えてしまう…そんな気がした。

何処にも…行かないで。

どうか…儚く消えないで。

俺の願いはただ其れだけ。

蘭のような悲しすぎる失い方をしたくない。

もう…嫌なんだ。

戦いで、心から大切に思っている人を失うのが。怖いだけかもしれないけれど…ただ、嫌だった。

蘭は、灰原以上に守ってやりたかった。

想いも伝えられずに蘭を失ってしまった。

コナンのままで…正体を明かした当日に蘭を失った。

悲しかった、泣いてしまうほどに。

辛かった、胸が苦しくなってしまうほどに。

虚ろだった、心も体も全て。

途方に暮れた、どうすればいいのか其処で分からなくなってしまった。

絶望した、蘭への想いも、何時か嫁に迎えてあげようという望みも全て。

後悔した、想いを伝えられなかったこと・工藤新一に戻ってやれなかったこと・早く正体を明かさなかったこと。

これ以上にまだまだ気持ちはある。

数え切れないほどに。

…蘭。今空の上でどんな生活をしている？

本当に、御免。

何度謝っても足りねえぐらい。

最後まで工藤新一に戻れなかったこと、最後まで想いを伝えられなかったこと、正体を明かさなかったこと。

此が一番大切な事じゃないのか。

何故、江戸川コナンになったとき素直に工藤新一と言って、その体になった事情を話さなかったんだろ？

正体を隠せとは貸せに言われ、その言われるがままにしていた。

そんな馬鹿な自分がいたんだな。

そんな事を想いながら、目を閉じ夢の中へと身を投じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8629d/>

心を襲う悲しい記憶

2010年10月10日02時58分発行